

第3回富山親学フォーラム

日時：平成16年11月7日（日）午後1：30

会場：富山第一ホテル 白鳳の間

パネルディスカッション

パネラー：明星大学教授 高橋史朗

：(株)イエローハット取締役相談役 鍵山秀三郎

：富山市立堀川小学校校長 恒田 勉

コーディネーター：(株)アイバック取締役社長 小沢伊弘

(進行役・金堂) お待たせいたしました。これよりパネルディスカッションを始めます。パネルディスカッションに入る前に、本日のパネリストとコーディネーターの皆さまをご紹介いたします。まず基調講演をしていただきました高橋史朗先生です。プロフィールについては割愛させていただきます。

次に『株式会社イエローハット』取締役相談役 鍵山秀三郎様です。鍵山様は『ローヤル』を創業、自転車一台の行商からスタートされ現在『株式会社イエローハット』を全国に展開されていらっしゃいます。平成10年6月に取締役相談役にご就任なさいました。また創業以来続けていらっしゃる掃除に多くの方々共鳴され、「日本を美しくする会」を創設されました。その後全国各地に「掃除に学ぶ会」が誕生し、国民運動となっています。主な著書に『日々これ掃除』『小さな実践の一步から』『凡時徹底』『一日一話』など多数ございます。

次に、富山市立堀川小学校校長 恒田勉様です。恒田先生は、富山県内の3つの小学校に勤務なさり、その後魚津教育事務所、富山県教育委員会教職員課、富山市立寒江小学校、富山県教育委員会指導課でも勤務なさいました。現在は、富山市立堀川小学校校長、富山県小学校長会会長としてご活躍でございます。「自主創造」を教育理念に、自らの可能性を開き生き方を深める子供を教育目標とし、毎朝子供達を自由に走らせるトレーニングを取り入れていらっしゃいます。これは眠っている体を呼び起こし、脳を活性化させ心身共にとてもよい結果に繋がっているということでございます。以上パネリスト3名の皆さまのご紹介でした。

続きましてコーディネーターをご紹介いたします。『株式会社アイバック』代表取締役 小沢伊弘様です。小沢様は現在、富山県国際課主任専門員としてご活躍中でございます。専門分野としては、企業コンサルティング、コンピュータサイエンス、都市計画などがございます。それでは小沢様、よろしく願いいたします。

(小沢) 皆さんこんにちは。

(一同) こんにちは。

(小沢) それでは、ただ今よりパネルディスカッションを始めさせていただきたいというふうに思います。

世界というのは、先日もアメリカ大統領選があつていろいろ...どんどん変わってきているわけですね。これからますます...それから新潟の地震、まだまだ恐らく、これは予測しないうまでも簡単な事なんですけれども、地震であるとか気象異常に関わる事というのは、まだまだ起き上がってくる。そうすると、今我々企業なんかで検討している真っ先に上がってくる課題が「セキュリティマネジメント」というか「危機管理」も含めたそういった「セキュリティ」「安全」という問題が一番課題としてきてるんですね。こういった事を意識的にやっておられたところが、今回のいろんな災害にあつても、それに素早く対応をとれて被害をより少なくしていったということも非常にあります。

それで今、この「親学フォーラム」においても、3回目ということで実際自分たちがこれから一体何をやって行かなくてはならないのかということ、もう少し個人に落としてきた段階で、今日はパネルディスカッションを最終的には進めていきたいと。

その前に、今一体どういう...皆さん先生方がどういう感覚を持っていられるのか、何を課題としていらっしゃるのか。親と子供の関係...先程も高橋先生から、いろいろと説明がありましたけれども統計的なデータであるとか、現実そういった事が起き上がってきているわけですね。それが日常生活の中で、それぞれの先生方が感じていらっしゃる課題というところをお話していただきます。まず最初に、実をいいますとうちの近所に中学生くらいで、後ろ姿がいかにマラソン選手という女の子がトントン走っているんですね。この子はきっと偉くなるんだろうというので、家では「ぴーちゃん」と呼んでいるんですね。なぜ「ぴーちゃん」と呼んでいるかという「きゅーちゃん」追い抜く人になるだろうという事で...。将来的にはそこに看板をあげて「ぴーちゃん、オリンピック出場おめでとう」ということができるくらいになって行かれるといいな、ということで心から応援しているんですけれども、なんでこの「ぴーちゃん」が走っているのかということ、フラッと、あるPTA関連の方から聞いたら、実は恒田先生のところで、しっかり走る・体力をつけさせるということでみんなそういう事を行っているという事らしいんですね。それで、現状そういった事もふまえて今課題として捉えていらっしゃることを、恒田先生からまずお話ししていただけますか？

(恒田) 恒田でございます。今年「親学フォーラム」というのを初めて出させていただいたわけですが、時間もないので早速話をさせていただきます。

今ほど話がありましたように、私今堀川小学校にいるわけなんです、紹介の折にも...今8時から8時15分まで朝のトレーニングをしております。この話を少ししていくつか学校の立場として皆さんにお願いしたいというか、今感じている事をお話ししたいと思

ます。

8時までに、ほぼほとんどの子供達は学校へ登校します。そして8時15分の間体躯の服装に着替えてグラウンドに出るわけです。1年から3年までは大体...そうですね6~70メートルくらいでしょうかね、グラウンド走るわけですし4年生以上は100メートルのコースを走ります。ここの約束はとにかく全員出ると。もちろん体の都合の悪い子はいないわけですが、グラウンドへ出て見るという事もあります。これは競争ではありません、自分の力に応じて1回でも構わないし10回でも構わないし、自分の力に応じてやるという事であります。こういう事が毎日繰り返されてますし、雨が降れば体育館で...冬になればこういう事はできないわけですが、冬には各学年にはプレイングルームという若干、集会ができるような狭いところに鉄棒を入れて鉄棒をやったり、階段を利用した運動メニューを作ってやったりとか。ですから堀川小学校では、年間この15分という時間に体を動かす時間を設定しているわけです。それによつての成果ですが、1つは...成果というよりも1つは、これをどう生かすかと。単に体作りでは「走りなさい」になります。うちは3年生以上が宿泊学習をやっています。一番最後は6年生の立山登山です。新聞報道されましたけれども、昨年度までは、雄山からの三山縦走です。時間にすれば6~7時間かかるところを歩きます。今年度は、八郎坂までいわゆる電車・バスを乗り継いで、後は1日目は弥陀ヶ原の『立山荘』に泊まると。ですから八郎坂を上るわけですよね、リュックを背負ったまま。その次は木道を利用して、獅子が鼻から地獄谷に下りて『雷鳥ヒュッテ』に泊まる、これも当然リュックを担がなくてはならないわけですね。次の日に雄山登頂で帰ってくると。帰ってくる時はもちろんバスで帰ってきます、電車を乗り継いで。こんな事が最終目標です。ですからこれに、休むとか...要するにケガをして休むということは、非常に彼らにとってはショックなわけで、そこに向けて一生懸命やります。3年・4年・5年・6年それぞれに宿泊学習があるわけですが、必ず登山もしくは、例えば4年生の『国立少年立山自然の家』では千垣まで行って、そこからリュック担いで岩嶽寺のスキー場を上って少年自然の家まで行く、という事をやっているわけです。つまりそのために、朝のトレーニングも1つの目当てになる。宿泊学習で何とか途中挫折しないで行くというふうな事でやっているわけです、そんな事を延々と続いておるわけです。

成果としては、1つは欠席が少なくなりました。私が来た頃朝トレをやっていたわけですが、完全学校週5日制になって2日間休みになりました。その時には月曜日に非常に欠席が多かったんです。それで意識付けながらやっていって、いまかつて...これまでは2.0という。つまり私、600人クラスですから欠席は各学年2人くらいという2.0をクリアいたしまして1.5になりました。現在1.5...つまりこれは、大体600とすれば各学年1ないし2くらいでしょうか、それくらいになるわけですね。それを、だんだん少なくなっているんですが、この調査は一応4月から12月までです。1月から3月までは、インフルエンザが流行ったらそういうわけにいかないの、一応校長会の方では4月から11月まで統計を出しております。こういう1つの成果があります。そういった事で、日々やっているわ

けです。眠い...これ始めた時もそうなのですが、子供達学校へ来ると中にはね、眠い目をこすっていたり居眠りする子もいるわけですし元気がない子供もいるわけで、そういったこともありまして、とにかく体を動かして目を覚まさせると。これは定かなものではありませんが、起きてから大体8時という時間帯...もっと言えば、8時半に授業が始まるとすれば大体1時間半~2時間前に起きればいいと...ちょっと長いかな?そういう話を聞いた事もありまして、そういった意味で眠気のある子供達も、そういう事によって体が起きるといふ事になります。こういった事に取り組んでいるわけで。

今堀川小学校だけの話をしましたけれども、この事はもう今学校は「生きる力の育成」という事で教育改革の荒波にいます。3つあります。「確かな学力」と「豊かな人間性」と後「健康・体力」です。この3つがあるわけですね、これまでの改革と大きく違うのは、完全学校週5日制というのと学習指導要領の内容の削減ということがあります。それに更に「総合的な学習の時間」とか「少人数指導」というものが入ってきている。なぜ今大変かという、特に「総合的な学習」というのは、皆さんもここでよっぽど「総合的な学習」の時間を...いって具体的にお話しされたら凄い人だと思います。つまり教科書がないわけです、ノートも...皆さん見られたかどうかわかりませんが、あまり見られないと思いますね。実際に活動することが多いわけですので、そういった意味ではなかなか先生方も実際に指導要領に「こんな事を指導しなさい」とか何も書いてありません。全部自分たちの手作りではやらない、非常にそういった意味で大変です。それから3割削減で、ご存知のとおり学力を付けなさいという事が盛り上がってきて、これに対する対応策・諸人数指導等も入ってきたわけです。これをどうするかも、今までこの2つについては全くほとんど経験がない私達であります。さらに「豊かな人間性」があって「健康・体力」もこれまで言われてきたけれども、今回ほど保護者...いわゆる家庭・地域の力を借りなかつたら子供は育たないと言われたことはない。そのために一生懸命努力をしている。

今富山県の先生方は、ハッキリ言いまして良く頑張っています。私は県外へ出ること、あるいはいろんな県外の先生方と話をしておいて、富山県の事を話すと「富山県って凄いな」という話はいくつも聞いています。まだまだ具体的に言いうと、こんなのがあります。放課後残したら、保護者から電話がかかってくる。そして「なぜ、うちの子を残さなくてはいけないのか」と。「それは、ちょっと計算ができないものですから」「それは先生の指導が悪いんでしょう」という話とか。じゃあ帰りにどうするのかと、こんな危ない時期に子供の安全が守れるのかということをする人もいます。感謝の前に批判が来ます。そういった中で必死になって先生方は頑張っているし、夏休みも今勉強が遅れがちな子、あるいは体力作りにそれぞれ出てやっているわけで、そういった意味では非常に今頑張っていると私は思いますし。

で、1つ目言いたいのは、学校や先生...特に先生を信頼してほしいということをお願いしたいわけです。これも高橋先生のお話の中にも出ておりましたけれども、私はやはり親が先生・学校を信頼するという、そういう心を持てば子供は安心します。安心しますしそれが子供

の信頼と尊敬に繋がっていくと思います。それが子供に元気を与えて学習意欲に繋がっていきます。

さっき高橋先生のメモの中にもあったんですが...多分これだと思います。オーストリアの動物心理学者コンラッド・ローレンツという方がこんなふうに言っています。「人間は信頼し尊敬する人からのみ伝統を受け継ぐようにプログラムされている」と。だから子供だって信頼し尊敬する人からだけ伝統を...例えば素直に親の心を受け入れるそういう子供になるんじゃないか、そういうふうにプログラムされているということです。もっと平たく言えば「先生を好きになってよ」という事です。好きになってほしい...嫌な先生もいます、きっとそうだと思います。私だって子供を預かっていて波長の合わない子がいます。しかしやっぱり、そのいいところは必ず1つはあるんです。そういったことで、批判は簡単です、簡単ですし目に付きますし言いたいですし、言ってください。でも根本はやっぱり、学校を信頼してほしい、先生を信頼してほしい...そうしてもう1つ言えば、先生を信頼してほしい好きになってほしいということです。こんな事を言って「信頼して」って言ったってだめですね、なりません。そのためには、学校を良く知ってくださいということです。先程言いました私共の学校の朝トレーニング、これを見ていたら確かに堀川小学校は連合運動会のリレーでは結構いい成績をとりますしタイムも速いです。そういうことを願っているだけではないという話をすると「え~そうですか?」という話になります。さらに先程言いましたように「総合的な学習」とか「少人数指導」を実際に見ておられると思いますし、本当に十分に参観日などで行っていただいて学校のやっている事を知ってもらいたい。学校を知ってもらいたいということは、学校の方針もさることながら教師のかかわり方、子供のやっている様子を充分に知っていただきたいということです。いつも思うんですが、批判というのはパパパッとと言われるんですけども、実はこうこうやっていますよというふうな事をいうと「はい、そうですか」と言う方はたくさんおられます。表面ではなくてもっと奥まで知ってほしい...学校をずっと奥まで知ってほしいということです。そういった事で、学校へどんどん出向いてください。で学校へ来れば...参観日もそうなんですが、うちの学校がお願いしているのが、来られたらいろんな方を知ることになります。ですからもっと保護者同士のネットワークも広げてほしいということです。今は学校は30人いれば、30対担任1で関わっています。昔は恐らく30対15。あとの15人は何をしているかという隣近所・同級生に電話して「こんなことだったらいいですよ、それだったら言ってください」というネットワークがあって、問題は大体半分は担任は済んだんです。今は30対1で対応している。うちの学校1年生・2年生は、下から2階まで上から下へ下りてきて職員室の電話をとります。それはそれでいいんですが、是非こういった問題について横との連携だとか縦との連携、こういったことのネットワークも広げて...していただくといいなというふうに思っております。以上でございます。

(小沢) はい、どうもありがとうございました。そうですね、ただ単に走らせるという

事じゃなくて、その中に目標を持って努力させるその中で意欲をあげさせるというポイントがあったと思うんですね。今俗によく言われているのは、創造力というかいろんな時代を生きていく時に、創造的にものをやっけていく時に必要なものというのは3つあると言われているんですね。1つは「深い専門知識」。これからますます知識社会になってきますから、勉強してますます知識を付けて行かなきゃいけない。ところがその以前に「意欲」というものが必要になってくると。「意欲」というのはどうやってつけるかという、目標を持たせてそれに向かって努力する習慣の中で「意欲」がついてくる。もう1つが「コミュニケーション能力」だって言われるんですね。これ広い範囲を必要とする。先生として非常に一生懸命、自分たちを信頼してくれという...先生を信頼してくれと言うことを、しっかり言っていらっしゃったと思うんですけども、すごく大切な要素で、よく学校で暴れたり先生の言うことを聞かない親御さんというのは、よく振り返ってみると親が先生の悪口を言っていると、当然親の先生の悪口を知ったら子供は先生の事を信頼もしないだろうし、その状態が起き上がってくるということもあるんじゃないかと。もう少しお互いに信頼し合って、しっかり進めていくって言うことも何か必要な状況だと思うんですね。これは、今学校の現状ということで恒田先生からお話を願ったわけですけども。鍵山さんの場合、いま現状をいろいろ捉えておられて何か課題と感じていらっしゃる、今この現実社会の課題と感じていらっしゃるの何かございますかね？

(鍵山) 鍵山でございます。よろしく申し上げます。今朝移動中に新聞を見ておりましたら、新潟で2歳の児童を発見したのは犬がですね、においで発見したと書いてありましたね。そこに犬が人間に対して嗅覚が五千倍働くそうございまして、それで生きている人間のにおいというものをまず犬が発見したと...こういうふうに書いてありました。おそらく人間も縄文時代には、犬に劣らないそういう嗅覚ですね...聴覚そういうものを持っていたと思うんですけども、だんだん物を蓄えて、そうして欲が出るとかそういうふうになるに従って動物的な...本当の本来の能力を失ってきたように思います。それにつれて、私は先程、高橋先生がお話をされたように自分の子供を守ったりかわいがったり、本当に人間が動物としても大切な、ましてや人間として大切な事がどんどん衰えてきた。嗅覚や聴覚が衰えるのと同じようにですね、そういう力も衰えてきたように思うんですね。そこで私は、自分がどう育てられたか...両親から、その事についてちょっと触れさせていただきます。

私が両親からどうされたかということは、大体幼稚園くらいの事からしか覚えがありません。しかし今でも...こんな70を超えた今になっても鮮明に覚えていることがあるんですね。夏の暑い時、何か少し明るいような気がして眠い中で目が覚めてみると、父か母が汗をかいた私の寝間着を脱がして、体を拭いて取り替えているということがよくありましたですね。ああ、私が寝ている最中にも何度もこうやって取り替えてくれているんだなあ...ということは、私はその時に子供ながら感じましたね。もっと私が幼い頃どうであったかとい

うことは、私の両親がですね、自分の孫を育てる...私の兄や姉に向かってどう注意していたか、そういうことを見て、私が幼い頃どんな扱いを受けたかということも知りましたね。それはどういう事かという、例えば赤ちゃんを抱き上げる時は手だけで抱き上げないんですね。自分の体を寝ている子供にくっつけて、そして体と一緒に起こせとか。それから抱いている子供を手だけで布団に寝かしちゃいけないと。そうするとこうやってビックリすると。ビックリさせちゃいけないということを、よく私の両親は言っていました。それはなぜか。一回ビックリさせるたびに子供は性格が荒っぽくなる...こういう事を私の兄や姉、兄の嫁に向かって本当にやかましく言っていましたね。そういうことを通して、私の両親がどういう子育てをしたかと。穏やかな人間にしたかった。現に私が物心ついてからもですね、両親の子育ては徹底して穏やかな性格を目指していたということが、はっきりわかっております。ですから、ここで私が何を言いたいのか。親として自分がどういう子供にしたいのか。もう性格なんかどうでもいいから勉強だけできればいいというふうにしたいのか、あるいは勉強は二の次でいいから穏やかで正直でまじめな人間にしたいのか、その点をはっきり描くことが大事であるのではないかと、こう思うんです。ところが残念ながら、本当は自分の子供がまじめなきちとした子供であってほしいという願いは心の中に持っているのに、違う事をやっている親がたくさんいますね。本当に大事な事をきちんと大事にしているかどうか、という目で見るとですね自分の本願とは違う育て方をしている...そういうふうには私は思います。ですから、一体自分の子供はあるいは孫は、どういう人間であってほしいのかということ、はっきり自分の心の中に描いて...画家がキャンバスに向かっていきなり絵の具を塗ったりしないですよ。ちゃんとどういう絵を描くかということを描いて、そして線を引き絵の具を塗っていくんだと思うんですけれど。そのキャンバスに向かった時に、自分の子供・孫の未来像をですね、どういうふうに描いているか。そして描いたらその描いたことに対して忠実に、子供が迷わないような育て方をするということがとても大切だと私は思っております。今世の中を見ると、どうも本願とは違う事を望んだり、あるいは違うことで喜んだり怒ったりしている子供にしている基準が明確ではないということ、私はよく見受けております。私は幸いにして、両親が両親共に...私5人兄弟でございますけれども、徹底して穏やかな子供にしたいという両親の気持ちがよく伝わってまいりましたので、おかげさまで比較的穏やかな人生を送ることができたと思っております。

(小沢) どうもありがとうございます。基本的に鍵山先生の話として、人間としての本能というのを優しさであるとか、人間として生きていく知恵みたいな、そういった本能っていうのが...これは親から伝えられてきて我々身につけてきている。そういったものがなくなっているということじゃないかと、お話としては。それと優しさであるとか、親がどういう子にしていきたいのかビジョンを持っていかなきゃならない。そういった意味ですごく勘が鈍くなっているというのが今の人間だと思うんですね。今回の新潟地震

でも非常に気の毒な話なんですけれども、生まれて2ヶ月でしたかお子さんを失われた時に、本来首も座っていない子を、なぜああいった車用のチェアに座らせてシートベルトをすれば守れるんだっていう発想になれるのか。本来は自分が抱きかかえていくという、そのちょっとした考え方というか知恵というものしか生を選んでいくような気がしているわけですね。そうすると、我々っていうのはもう少し人間としての...今いろんなイデオロギーで、イデオロギーの大半っていうのは裏付けがないような事が非常に多いんですね。ただ「こうありたいから、こうもっていく」という感じの、そういうものに煽られすぎて本来の親として人間としての本能というものを、もう一度しっかり、大切さというのを考えてみる必要があるんじゃないかと。それで、よくこれは...ジェームス・アレンという人なんですけれども、『原因と結果』という有名な本を書かれてますけれども、その中で言っていっぱい、人間がこれは「勘」っていいですか、本来の知恵に基づいた「勘」を養っていく時に一番大切なことっていうのは何なのかというと、まず自分の中を見てみると。それからそれに対して自分なりに分析してみると、自分はどうしてこういう事をやろうとしているのか...こういう事を望むのか。それをもっと正しい方向に適応させていこうと。言ってみれば今まで言われつづけた「反省をする」ということ、自分自身が反省をしていくっていうことが、本来人間としての本能...正しいものを選び取る。そうでないと、いろんなそれらしき声のでかい人がぎゃーっと叫びながらイデオロギーを説いて来てますので、そういうものに煽られていくと判断を間違えてしまう。もう一度自分たちを信じる、自分たちの中にあるものを信じると...何か鍵山先生がおっしゃっているのは、もう一度自分の中にある本来人間としての本能というものを、しっかり見つめてみなさいという...そういったことを見つめていないような時代になってきているということじゃないかと思うんですけど。これを高橋先生、どう感じられますかね。

(高橋) 今「イデオロギー」という話が出てきたんですけれども、私も今一番感じていることは、どうしても教育界は不毛なイデオロギー対立になってましてね。何が子供の心を育てるかという「育」の視点から考えていけないんじゃないかと、今思い始めたんですね。今から20年前に臨教審という政府の審議会で3年間教育制度の改革論議に参画させていただいて、制度改革の限界というのを逆に毎週3時間議論してきたもんですから...感じるようになって、現場からもう一度考え直してみようというふうになるようになりました。そして最終的にはやはり、「人作り」というか1人からの教育改革...こんな事を言ったら気の遠くなる様な話なんですけど、そこからしか始まらないんじゃないかと、だんだん考えるようになりまして、もう1人からの出発と。それで「親学」「師範塾」、親と教師が変わるためには何が大事なのか、ということから今手がけているんですけれども。そこでこれが、今僕が一番課題として感じていることなんですけれども、何が子供の心に火をつけるのか、何が幸せに繋がるのか。そして今、自分自身を振り返るということをおっしゃいましたけれども、我々1人1人が元気になって、1人1人が本当にやる気が出て

くるという源は一体何なのかという、そこに帰る必要があるのかなど。それで今「師範塾」なんかで私が一番意識していることは、1つは「目標・夢・志」そういうものをいかに確立するかということです。これは元々僕は『松下政経塾』で「志」審査という審査員をさせていただいて...「志」という目的意識ですね、これがなければ意欲が湧いてきませんので。「目標・志・夢」その目的に向かって今どういう課題をやりきるかという、そこを徹底してやっていくということが大事なのかなど。

2番目は「持続力」ですね。一旦志を立てても、だんだん元の木阿弥になっちゃうもんですから、これは今日ご紹介した、13年連続陸上競技で優勝している教師は「ネバー・ネバー・ネバー・ギブアップ」といつも言っているんですが、決してあきらめるなど。そういう持続力ですね、それをいかに自分が持ち子供に育てるか。

3つめは「チャレンジ精神」ですね。だんだんチャレンジしなくなったものですから。でもそれは大人がチャレンジしていないから、「お前ら、チャレンジしろ」といっても「あんたはどうだ」という話で、親や教師がチャレンジしているかどうか問われるわけですね。それから「リーダーシップ」。どうしても事なかれ主義で、出る杭は打たれるというふうになってしまっているの、私は「教育界出る釘ネットワーク」と昔から言っていて、「ちょっと出るから打たれるんでドーンと出ましょう」と過激なことを言っているんですが。そのいい意味での「出る杭」ですね、悪い意味の「出る杭」じゃなくていい意味での「出る杭」になっていくという、リーダーシップを発揮できる人がどれだけ出てくるかということは、まず自分が範とならなくてはいけないんじゃないかと。それから、心を育てるとかモラルを育てるとかというのが、なかなか今難しい時代ですね、今日僕は「親身」と「心施」ということを盛んに強調したのは、最終的には親身になって自分ができる最大限の心施をどこまでできるか。それを毎日できることが「徳」ということ「モラル」ということになるんじゃないかというようなふうに思っているものですから、大人達がいかに親身に徹して心施を日常的に実践できるかという...それが実は「心を育てる」とか「道徳教育」とか「感性を育てる」とかいうことにかかっている、つまりは私達自身にかかっていると。何か特定のイデオロギーを教えることが心の教育や道徳教育ではなくて、その生き方にかかっているんじゃないかなと思ったんですね。

それから5つ目は「やる気を引き出そう」。自分自身のやる気も含めて。私の「師範塾」に集まってきている名人はみんなやる気を引き出す名人ですけど、何をしたいかというのをはっきりさせている、今何をしているかということをはっきりさせている、今どこまで来ているかということをはっきりさせている。そして1つ1つ課題に向かってやる気を出しているという、その辺が人作りの大事な課題なのかなという事を思っていること。最後に「師範塾」では、萩洋館だとか、龍馬脱藩の道を歩くと...吉田松陰が歩いた32キロ、坂本龍馬が歩いた62キロですか、その道を親子で一緒に歩いてもらうんです。困難を乗り越える体験を一緒にやるんだと。「お前ら、がんばれ」というふうに言うんじゃなくて一緒に困難を乗り越える体験によって、本当の絆が広がっていく...そんなことも大事な人作り

の課題なのかなあと、そんなことを今一番考えております。

(小沢) ありがとうございます。そうですね、何事もしっかりとした継続であるとかチャレンジ精神とか、いくつかのキーワードがあったと思うんですね。親身にもの考えるであるとか...心から相手の事を考えてあげるといふ事なんでしょうけれども、これはなかなか難しく、それとリーダーシップという言葉がありましたけれど、リーダーシップにいくつかの方補放論があるという...よくビジネス系統の本ではよく言われるんですけども。1つは「権威をもってリーダーシップをとる」。昔親というのは自分の権威で家を引っ張っていったというのがあるわけですね。2つ目に上がってくるのが「親密リーダーシップ」というやつで、いかにも相手のことを本当に考えてあげて、相手を受け入れた形の中で相手を引っ張っていくというやりかた。それから3つめとして「デモクラティック・リーダーシップ」と言いますか、民主的リーダーシップ。台頭の立場で、相手と話し合いながらリーダーとして引っ張っていくというやり方。それから最近はこの非常に弱っているんですけども「強制リーダーシップ」。強制的にやらせるという、そういった事も1つ。5つ目にあがってくるのは「ペースセティング」というやつで、背中でリーダーシップをとって、自分が先頭して行ってリーダーシップをとって行ってやるというやり方。そして最後の6つめとしては「コーチング」というやつで、コーチとしてやりながらリーダーシップをとっていく。この6つのリーダーシップのパターンがあると、どれがいい・どれが悪いという事じゃなくて、何かをやっていく時に、今自分が何が必要なんだと。特に盛んによく言われているのは、最近はやたら相手の意見を尊重するというか、民主リーダーシップっていう...本来は民主的にはリーダーシップなんて有り得ないんだと。強制的にやらせるという要素がリーダーシップの中で欠如しているじゃないかという事もよく言われるんで。今回やはり、親がリーダーシップをとらなきゃならないという要素もあると思うんで。最近をよく「子供と同じ目線」という話だけが先行していて、親は親の目線があって上から見て経験も豊富なわけですから、当然引っ張って行ってやらなきゃいけないところもあると思うんですね。

こういったところで、鍵山先生この辺をどう思われますかね。こういったことを。

(鍵山) 今のリーダーシップの点？

(小沢) ええ。

(鍵山) この「リーダーシップ」というのは、私が最も欠けているところでございます、言葉で説得をしたりあるいは文章で説得をすることができなかったために、ひたすら私は自分の行為で...続けていくということをやってきました。そのためには、人様が1年や2年でできることが私は10年かかりましたし、人様が3年でできることを私は20

年も 30 年もかかったわけですが、それでも時間をきちっとかけてでもですね、ハッキリとした目標を頭の中に描いて、そういう社員になってもらいたいのか、どういう会社でありたいのかとかですね、そういうことを私は頭に描いてそれからはずれないように...そういう努力をしてきたつもりでございます。その結果、決して会社の成績としては誇れない、いつも人の後塵を拝して...同じ仕事をしているのにどうして同業者に比べて、こんなに成績が悪いのかというふうによく言われるんですけども、私はそれでもいいんですね。もしか私が、成績だけを第一主義にして社員が荒れたり、あるいは人様に何かを強制したり迷惑をかけたりですね、そういうことによって成果をあげるんだとしたら私共の会社は意味がないんだ、そういう考えを持ってやってきたんですね。まだまだ私の願いとはほど遠い現状ではございますが、どんなに苦しくても、基本的な方針は変えずにずっと貫いていくと...こういうふうになりたいと思うんですね先程私両親の話をしましたけれども、両親は 2 人とも小学校 4 年しか行ってないんですね。非常に貧しい出です。しかし、一貫して人様に顔向けができない様なことは絶対しないということですね、人に迷惑をかけない、そういうことを貫いてきましたね。だから子供達に対しては、学校の成績やなにかで言うことはありませんでしたけれども、人の迷惑になりそうなことですね...なるんじゃないなくて、なりそうなことに対して実に厳しい基準を持っておりました。そのお陰で、兄弟 5 人ですね非常に譲り合って、両親が亡くなったあとの遺産相続も何一つもめないですよ。みんな「自分たちはいらない」ということをですね、そして譲り合うというような。世間によくあるような、奪い合うようなこともなくて、ああ両親の教育はきちっと生きていたなそれだけではないんですよ、私の甥や姪までも同じような...私の兄が 2 人亡くなっておりますけれども、その自分の親が亡くなった時の相続の様子を見ると本当に何一つ争いごとも起きないですね、穏やかに済んでおりますから、やはり両親が、どういう子供でありたいかということを示して、しかもそれを行いで...言葉でも文章でも何も無い行いではっきりとしたりっばなリーダーシップをですね、私の両親はとってきたと...このように思っております。

(小沢) どうもありがとうございます。鍵山相談役といいますか社長さんをやっておられた時、ずっとトイレの掃除をご自身がやられて、それで 1 つのペースセティングをして引っ張ってくるというか。本当に子育てにしる、子供を育てるということ自体っていうのは今のリーダーシップのいろんなパターンが起き上がってくるし、1 つのパターンでは収まらないところがあるんですけども、背中で何が教えられるのかという...それを 1 つ捉えた時にご自身、我々よく考えてみなきゃいけないのは、自分の背中で何を伝えようとしているのか、何を教えようとしているのか、もっと冷静になってそれを考えてみる。知らずのうちに自分のやり方そのものを真似られて、人を簡単に拒絶したり人を簡単に疎外したり悪口いったり云々...というそういった事をやっていけば、当然それは伝わっていくという 1 つの形だと思うんですね。鍵山さんの場合の「いい思い」というのも逆にそう伝

わっていくというところで。恒田先生、今いろんな課題、今やってらっしゃる事があるわけですけども、こういったことをどんどん推進していくために、親御さんに求められるものって何かありますか？

(恒田) こんな時期ですから、やはり私学校の立場として来ているんで...きっと私が先程言ったことも、これから言うこともそれぞれの学校の校長が方針として述べていることだろうと思うんですが...重なる部分が非常に多いと思います。

1つは、もっと子供から離れて子供をみてほしい、見守ってほしいと。その際に口は出さずとも目は離すなという。この「目」というのは実際目でもあるし心の目でもあると。つまり、やはり子供に安心感を持たせるには、親は見ているんだよというものが実際の目、あるいは親子関係の人知れずそういう目で見てるんだよという事をお願いしたいわけです。やはり感じることは、ここにおいでの方皆さんもそうだと思うんですが、教育に関して学校に対して非常に関心を持っておられるんですね。我々の時は、親は生活に精一杯でしたので全部我々は自分でやらなければならないし、私は長男ですけども...長男であれば下の2人の兄弟を面倒見なければならない。そういうことを考えると、親なんて頼りにしていないんですよ。だけど信頼はしているけれども頼りにならない。子供も生活を支えていく1つの役割を果たさなくてはならないわけですから、手伝いもしなければならないわけですね。それから手伝いでも親の手伝いもあれば、自分で家族の仕事としてやらなきゃいけない部分もある。私は、玄関掃除と家族の布団敷きを毎日やらされたんですが、何かそれがいいなあとと思っているんです。先程言ったように離れてほしいというのは、いまちょっとベッタリしすぎないですか？という事を言いたいんです。よくご存知のように1人の子供に対して6人の親の目があり手があると、いうふうに言われますね。私もよくあるんですが、子供が何かをしでかすと子供が言う前に、大人の手が伸び口が先立つ。子供が何も全然言わなくてもいい。こんなふうにしていくと、私が一番心配するのは何か壁にぶち当たった時、失敗した時にどうはい上がるかと。いわゆる、今こうやって見ていたら非常に子供達はいきいきとやっていますよね。どちらかという、教師側もそうなんですがその大人の楔をどんどん打っていく、結果的に見ると成功しているんですね。だから危ないと思ったらそこへやっちゃいけない、「こうしなさい」。ここへ行こうと思ったら、「いや、そこよりもこっちの方がいいんじゃないの」というふうにして、よくよく考えてみたら、全部大人の都合でやっているんじゃないかという事です。子供には失敗しても責任はない、それはお母さんの言ったとおりお父さんの言ったとおりやったでしょ、先生の言ったとおりやったでしょ...という話になる。責任がないわけですね。確かに「やった」という「成功感」はあっても、困難を乗り越えた「成就感」というものは少ないんじゃないかなというのを思うわけです。我々は結果もさることながら課程を大事にするということも、やはり子供1人1人に責任を持たせていかなきゃいけないと。何事をするにしても自分が判断したことは、絶対責任を持たせる。「あなたが言ったんでしょ」でも親は大抵言います

よね。「でも、私が言ったけどあなたが決めてやったんでしょ」と言うけれども、考える前にやらせているわけですよね。という事はありませんか？ということです。こういう事を言うと、やはりたくましい子供にしたいというのは誰もがそう思うんですが、やはり離れてみたらとてもいい事があります。ちょっと皆さん、子供って全部よくありたいと思うし、自分の向上を望んでいますし、他から認めてもらいたいと思っていますし

(恒田) いうふうに思っているんです。ですからこんな事を...もうひとつ言いたいのは「子供を信頼しよう」ということを言いたいんです。これは河合隼雄文化庁長官が、ある雑誌に書いていたことをちょっと読んでみます。これは教師に向かって言ったんですが、これは我々大人が...教師も含めて親としても考えなきゃいけないことだなと思うんですが。「子供は素晴らしい、信頼できるということに尽きる」とこれが結論です。「本当に子供と向き合えたと感じた時、子供は素晴らしい反応をしてくれます。その時の子供の目の輝きを見た人は、心から子供を信頼できることを、そして時にはそれが大人の知恵を超えた物であることを、しっかり認識できるでしょう。子供を信頼して正面から向かうことによって、子供の生きる力を実感できるでしょう」と。ですから、信頼して正面からぶつかって行って、その時にいきいきとした輝く目を見つけていてもらいたいと思うし、私達も努力しています。これほど我々教師として、やりがいのある事はないわけです。そこで最後に、俵万智さんというこの人の言葉を先輩の人から聞いたんですが、今堀川小学校でも毎回言っています。「寒いね、との問いかけに寒いねと答えるあたたかさ」ちょっと言葉が違ったかな？やっぱりお互いに、問いかけに対して答えていく...そういうあったかいものを考えて行ってほしいと私も思うし、先生方もそう思っているし、皆さんも一度かみしめてみてほしいなというふうに思っています。

(小沢) どうもありがとうございます。先程の「口出すな、でもよく見ている」というのは...よく我々企業なんかでも使うのは「社員を100%信頼しなさい」と「だけど絶対信用するな」と。これはどういう事かという、必ず途中チェックを入れなさいと。本来その人はちゃんとやれる人なんだけれども、きちっとした...信用するなと言うのは、ほったらかしにするなと言うことで必ずチェックを入れなさい。ところが今見ていると、100%信用しちゃって全然信頼していないと言うか...こういうパターンが起き上がると必ず社員はダメになります。もういいかげんになって。これも、子供の中でもそういうことが言えるんじゃないかと。ですから、今恒田先生がおっしゃっていたように「口出すな」というのは「信頼しなさい」と。自分の子供だと...100%自分を愛しているこの子は100%信頼する。だけどほったらかしにして、信用しっぱなしになると、とんでもないことになるよと。そのあたりを、どう「しつけ」というものをしっかりやるかっていう...そういったことが必

要なんじゃないかという所なんでしょうけれども。鍵山先生の、個人個人に落としていった時に、いろいろ皆さんいろんな事がわかってきたけれども「私はどうしたらいいのか」というこういった事になった時に、何かこの辺でヒントなりポイント...いろいろな状況の中にいらっしゃる方々がいらっしゃると思うんですけれど、ご自身の体験の中からでも何か個人に落としてきて、こういったことを日々どうやった気持ちでやっていくのか...そういったところをお話ししていただければというふうに思っております。

(鍵山) 人間にとって誰でも命は大切、健康が大切ですね、国が大切といいながら、本当に自分の命は日々大切にしているか、本当に自分の健康を大切に生活をしているかということになると、およそ違った...掛け違った生活を送っている人が世の中には多いと思うんですね。国家がなければその国の国民がどんなに悲惨になるかという事は、皆さん世界の例でご存知のとおりでございますけれども、それでは日本国民はみんなこの国を大切にしているか?という私は大切にしていない人の方が多いように思います。そういう姿を子供がみんな見ているわけでございます、そのままいくら良いことを言っても...良いことを言えば言うほど、子供は胡散臭さを感じないように思いますね。会社でも私が反社会的な事を日々やりながら「我が社は社会に貢献している」なんて言ったら、社員は「冗談じゃないや、何言ってるんだ」とこういうふうになりますね。やってる事と言っている事が食い違うほど、子供を迷わせることはないと思うんですね。ですから自分の子供がどういう性格の子供になってもらいたいのか、そういうことをきちっと決めていく。それは何を望むかは、それぞれの違いですからそこまでは私は「こうしなさい」ということではない。しかし自分がはっきりと、自分の子供はどう育てたいのか、どういう人間にしたいのかという事をはっきり決めたら、それから逸れないような生き方を親がまずするという事ですね。私は、子供が成績より性格を大事にしてきました。じゃあどうしてきたか。私も大変忙しいですけれども、こうやって...これは私がハガキを書くために使ったボールペンの芯です。35,700枚のハガキを書き...その他に万年筆や何かで書いたものもありますから全部ではありませんけれども、少なくともボールペンで書いた時に使ったボールペンの芯...これだけです。そうしますと、私がいちいち言わなくても子供はその姿をじっと見しておりますし。私は家で「あぐら」をかいたことがありません。私もよそへ言った時ですね、ズボンがしわになったりしますので、つい膝を崩しますけれども、家で子供の前であぐらをかいた事はありませんし、どんなに疲れていても夜休む時以外に...体の具合が悪い時は別ですけれども、子供の前でゴロンと横になってテレビを見たなんて事は一回もないです。私は、そういう子供になってほしいと思うからそういうふうにしてきた。皆さん方も、どういう子供であってほしいのかというふうに思ったら、その自分の願いがかなうためには、どういう生活を...生き方をしたらいいかという事を決めて、それを実践して下さることを私はお願いをいたします。

(小沢) 基本的にはやはり、俗によく言われるんですけども、話をわかっただけでは世の中は変わらない、自分たちは変わらない。わかったことを本当に自分の思いという意識にしなければだめだと。その意識にする時には習慣づけなきゃだめだと。ですから自分たちがその習慣を作り上げなかったら、これは良いことですねとわかるんですけど、それをやっていくための習慣づけをした時に意識に入ると。意識に入るとそれが現実のものとなると。ですから、さきほどちょっとお話ししましたが、興味ある方は是非とも本屋さんで探してみられると、今ベストセラー...もう古いですけど、なっています。ジェームス・アレンという人の『原因と結果』っていう。これ本来の英語の題名は『As A Man Thinketh』といって、人は考えたとおりになるという題名なんですね。ですから今ほど鍵山先生のお話にあったように、まず自分が描いているビジョン...こうありたいんだっていう、それを描いていてそのためにどうしなきゃいけないのかと 言うことを設定して、それに向かってそれを習慣づけした時にはそうなっちゃうという、ごく当たり前の話で。貧しくなる人は貧しくなる習慣を持っていますしね、お金持ちになる人はお金持ちになる習慣を持っているんですよ、はっきりいいますと。家庭が不幸になる人も家庭が不幸になる習慣を持っていっちゃるし、みんなそういうものだ。だから全部、亭主が悪かったせいでもなし奥さんが悪かったせいでもなし、姑が悪かったせいでもなし。そういうふうに、自分が全部設定したという。そういった自分の努力の大切さというか、ビジョンを持ってやっていく事っていうことを、鍵山先生は何かおっしゃってらっしゃる形になると思うんですけども。この後のワークショップの中で、もっと詳しい所を皆さんお聞きになったり、ご一緒に考えられるとよろしいんじゃないかと思えますけれど。高橋先生、最後に何か一言個人としてやっていく上において、何かありますでしょうか。

(高橋) 私は周りから「男シンデレラか?」と言われていたんですが、12時には帰るといいう事になっておりました。それは朝5時に起きて、必ず1時間から1時間半小さな山に登るのを日課としておりました、必ず日の出を拝みます。もちろん見えない日もありますが、それは、今日「心の扉を開くのは、感動体験・喜び体験・感謝の体験」だと言いましたが、そういうものを自分が生活の中で実感していないと、それは観念になってしまうので、自分の中で毎日感動する...そういう生活をしようということが、まず最初の出発点でやっております。そして、何度も繰り返して申し上げてきた「親身になって自分ができる最大限の心施をする」という生き方、これを徹底することが「親が変われば子が変わる」ということを現実化していくことではないのかと思っております。つまり「温かい心を育てる」ということですので、今憎しみの連鎖それからトラウマの連鎖の中でみんな疲れている。教師も疲れている、親も疲れている...みんな疲れているんですけど、その疲れている連鎖を断ち切る生活を自分がスタートする以外ないんで、そこから喜びを広げていく、変革のひな形を身近なところから広げていく。それを実践していく。小さな実践からそれを広げていく以外に世の中を変えとか、子供を変えとかいうことは有り得ないんだと

いうことを、しっかりと肝に銘じてそこを徹することではないかと思っております。

(小沢) どうもありがとうございます。そうですね、いろいろお話を聞かれて、なかなか大変なことを...大変だと思うんですけど。あまりこういう話をすると「もう、ダメだ」という「自分はもうできない」という発想になられると思いますので。この中で一番...つくづく思うんですけど、いろいろな企業さんなんか見てまして、ダメになっていく人とうまくいく人、少々はダメになっても後で必ず救われる人のキー・ポイントというのは「やさしい人」なんですね。「優しい人」は必ず後でなにかがうまくいくという。それを、優しい心を持つという、またなかなか難しいでしょう。大変のその中ではいろいろあって、最後に1つになりますけど、これは何度も言いますように、アメリカで成功しているリーダー、家庭も幸せで云々やっている人に共通する一点というのは、「子供の時に犬を飼ったことがある」という...これが共通する一点なんだそうです。日本の場合は、共通する一点というのは御仏壇・御先祖に手を合わせる習慣を持っている人なんだそうです。ですから基本的に、こういうやらなければならぬ事はたくさんあるけれども、原点というのは「感謝する気持ち」というのをどうやって習慣づけるかということも、すごく大切な要素だというふうに考えます。

時間がないところで、今日は実は打ち合わせも皆さんと全然とってなくて。皆さんそれぞれの考え方を非常にしっかりお持ちの方なので、こういったことにも対応していただけるというところで、非常にちょっとご迷惑をおかけしたんですけども。これからもしっかり、我々本当に、何も完璧に「こうあらなくてはならない」「あああんなきゃいけない」ということじゃなくて、今回はもっと方法論を学ぶという事よりも、今回のワークショップを通してその根底にある心とか、自分たちがどういう習慣づけをしていかなきゃいけないのか、というところからワークショップ等に出てみられれば、より意味がある形になるのではないかというふうに思います。

これはもう、時間的にはちょっと限界が来たと思いますので、この辺で終わらせていただきます。どうもありがとうございます。

すいません、もう一つ。

(高橋) すいません。今日は基調講演で私時間の配分を間違えまして、一番大事なところを今日言えなかったのです。見ていただきたいところだけ、レジュメの「PQを育成するポイント」を8つ、そこにあげております。それから「子は親の鏡」という、これは一番最後の5枚目に「子供が育つ魔法のことばより」ということで「子は親の鏡」という大変素晴らしい詩があります。ぜひ今日は一番触れたかった所を、時間の配分を間違ったために触れられなかった所を後で見ていただければと、この事だけお願い申し上げます。

(小沢) どうもありがとうございました。

(進行役・金堂) パネリスト、コーディネーターの皆さま、どうもありがとうございました。ここで質疑応答の時間をお取りしたいのですが、時間の関係上お取りすることができませんので、この後第2部で行われますワークショップ会場でお願いいたします。それではここで、パネリスト・コーディネーターの皆さま並びにご来賓の皆さまの退席となります。本日は誠にありがとうございました。